

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">巽 昌子</p> <p style="text-align: center;">【比較社会文化学専攻 平成23年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>日本中世社会における相続と文書-「処分状」の役割に着目して-</p>	<p>日本の中世社会では、相続に際していくつかの様式の文書が用いられたが、本論文は従来必ずしも詳細には吟味されてこなかった個々の文書様式の性格や役割を解明し、もってそれらを必要とした社会的背景を明らかにすることをめざしたものである。日本中世の相続をめぐっては、法制史、家族史、女性史、荘園史などの分野で数多くの研究が蓄積されてきたが、本研究においてはそれらの研究を参照しながらも古文書学的なアプローチをとっている。</p> <p>前半ではまず「譲状」は相続各人の相続分を記して相続人ひとりひとりに渡される文書、それに対して「処分状」は相続対象となる全財産と相続人を一括して記して嫡子など「家」の統率者たるべきものに渡される文書であったことが解明される。五摂家のひとつである九条家では、南北朝期から室町期にかけて「処分状」が変化し激減するが、その背景には一条家の分立や諸子分割相続から嫡子単独相続への変化・移行などがあったこと、「処分状」は置文、さらには後代の家法や一揆契状などの在地領主法の源流として位置づけられることなどが論じられた。</p> <p>相続はさまざまな社会・集団でみられたが、後半では「第二の貴族社会」ともいわれる寺院社会の相続が取り上げられ、比較対象とされた。まず醍醐寺報恩院の坊から院家への発展、醍醐寺内における地位の確立などが相続を軸として検討され、同院が座主坊である三宝院に匹敵する有力な院家であったことが明らかにされる。そのうえで、醍醐寺諸院家の相続のあり方とそこで使用された文書の関係が検討され、貴族社会の相続における「処分状」に相当する文書として「付法状」が浮上させられ、「付法状」を軸として寺院社会のあり方、相続の特徴などが明らかにされた。</p> <p>以上のように、本論文は相続関連の文書の変遷をたどることによって相続形態の変化、さらには中世社会そのものの変化に迫ったものである。</p>
審査委員	(主査) 教授 安田 次郎	
	教授 古瀬 奈津子	
	教授 浅田 徹	
	教授 新井 由紀夫	
	教授 神田 由築	